

## 野田市の山岳信仰③

### 霊神碑が語る木曾御嶽講の歴史

石田年子

はじめに

木曾御嶽山は長野県と岐阜県の県境にそびえる標高三千m余の火山で、古くから霊山として人々の信仰を集めてきた山である。

江戸中期までは、厳しい修行を積んだ道者と呼ばれる限られた人々が、七十五日から百日もの精進潔斎を重ねた後に初めて登拝が許されるという、庶民には閉ざされた信仰形態の山であった。それが、軽い潔斎での登山が可能となるのは、尾張出身の覚明行者という人物が、一般庶民への登拝の開放を訴え、多数の信徒を率いて黒沢口登山道から登頂を強行し、山道を拓いた天明五年（一七八五）からのことである。

又、それから七年後の寛政四年（一七九二）には秩父出身の本山派修験・普寛行者により王滝口登山道が拓かれるとともに、江戸市中や関東一円への布教活動も行なわれ、多くの講が結成されることとなる。

これによって、木曾御嶽山は富士山に次ぐ山岳信仰の山として日本国中に喧伝され、幕末には関東を中心に全国各地から木

曾御嶽山をめざして集まる御嶽講の信者達が、年間二千人から三千人にも達したことが、残された宿帳などから推測されている（1）。

関宿城博物館・研究報告第十一号で、筆者は野田市内の石造物から富士講の実態を報告したが、時代を同じくして発展した御嶽講は、同市においてどの様な状況であったのか、市内に残存する石造物から考察してみることとする。

#### 一 野田市の木曾御嶽講碑

筆者の調査による野田市内の御嶽講関連の石造物は、いわゆる御嶽塚が三十九ヶ所、塚を造らず碑のみを祀る場所が三十ヶ所で、それらの総数は百八十七基を数えた（後に一覽表掲載）。

又、御嶽堂一宇、明治期の奉納絵馬一枚、金剛杖多数なども確認しており、市内の山岳信仰関連遺跡としては富士講に次ぐ残存数である。

## 1. 野田市の御嶽碑造立の推移

野田市における御嶽講碑の初出は、中野台河岸・稻荷神社境内に築かれた御嶽塚に立つ寛政十年（一七九八）造立の自然石碑である。これは江戸期における御嶽山開山の祖の一人である普寛行者が、まだ生きて活躍していた御嶽講の黎明期にあたる時期の造立であり、極めて貴重な石碑といえる。しかし、実際に野田市内の一般の人々が御嶽講として活動を始めるのは、少し時代が下がってからのことではないかと思われる。

図1は、市内の御嶽講碑中に年代が刻まれた百十一基の造立年を、折れ線グラフにしたものである。嘉永元年（一八四八）に始まる石造物の造立は、明治期に入ると神道への転換などを契機に大きく動き出し、明治半ばにピークを迎える。それ以後は、十年毎に十基前後の造塔が繰り返されるといふ安定した時代が昭和前期まで続いている。尚、御嶽講碑の最終造立は、西三ヶ尾に現在も残存している旭山講の三代目先達・坂巻重男命の昭和四十三年（一九六八）造立の霊神碑である。

## 2. 富士講碑との比較

図2は、野田市の富士講碑と御嶽講碑の年代別の造立数を比較したものである。富士講碑は筆者が調査した二百七十四基の内、年代の記されたものを、同じ場所で同時期に造立したものを一基と数え、御嶽講碑と並べてグラフにしてみた。

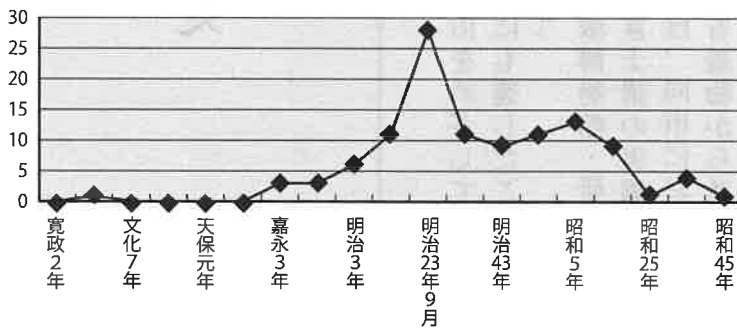
### ① 富士講碑

市内で初めて、いわゆる富士塚が築かれるのは、木間ヶ瀬村飯塚に名主・岩本治平の発願により天明二年（一七八二）に造立されたものである。木造の堂が塚上に祀られていたと推測され、天明期の石造物は治平と世話人連の寄附碑のみであるが、

岩本家には、築塚の際の寄附金額や村人の工事参加回数などが記された多くの記録が残されている。

次いで化政期や幕末に数基の塚と石造物が確認できるが、それ以外の多くは明治期の神道転換期に造立されたものである。春日部市西宝珠花河岸を拠点とする扶桑教・丸宝講が村瀬寶を中心として活発な布教活動を行ったこと、野田市の中心部を傘下におさめた齊藤忠七率いる山参講、さいたま市岩槻区を拠点とする丸岩講などの講が入り乱れての布教活動により、明治初期より明治二十年代は富士講が大きく躍進している。

図1. 野田市御嶽碑造立の推移



しかし明治三十年代に入ると、市内で富士講を牽引していた指導者たちが高齢化したことが影響した為か、求心力を失い、富士講碑の造立も急速に減少してしまふ(2)。

### ② 御嶽講碑の変遷

先に述べたように、御嶽講碑の先駆けといえる碑が寛政十年(一七九八)に中野台に造立されているが、その後の五十年間は御嶽系石造物の造立はなく、唐突な感じで船形・香取神社に弘化五年・嘉永元年(一八四八)に御嶽塚が出現し、それ以後に各地に塚や石碑の造立が相次ぐ。

明治初期には富士講同様に神道への転換と講の再編が重なり、富士講碑ほどではないが、石造物ラッシュが訪れている。碑の造立数で見ると、太平洋戦争前までの五十年あまりはコンスタントに造塔が行なわれており、安定した信仰活動がみえるのは、後述する旭村宝山講ほか、在来の講による代参などの地道な動きによるものである。

### ③ 富士・御嶽塚の考察

野田市内の富士講碑は天明期から姿をあらわし、化政期にも四基が確認されており、御嶽講と比べると活動の時期も早い。後発の御嶽講は先を行く富士講の方式を踏襲したようで、塚の形式や講紋などは知識がなければ区別が出来ないほど似かよっている。

江戸後期から山岳信仰の活動が見え隠れしながら(3)、市内で確認できる石造物の造立が極めて少ないのは、幕府の厳しい取締りや規制の影響と考えられる。

それが万延元年(一八六〇)から明治維新までの十年足らずの間に、両講合わせて十二基の大規模な塚が築かれるのは、開国・尊王攘夷・大政奉還と国を揺るがす社会変化に、庶民の信仰活動などに目を向ける余裕のなくなった江戸幕府を、敏感に

キヤッチしての行動ではなからうか。

### 3. 御嶽講碑の種類

御嶽塚は村の鎮守社の境内、講を主導した先達の敷地内、個人信者の敷地内などで確認した。塚上には御嶽信仰の本尊である御嶽山座王権現。脇神の八海山大頭羅神王、三笠山刀利天宮が祀られ、そのほかに霊神碑、不動明王、寄附連名碑、登山記念碑など御嶽信仰に関わるもの。灯籠、手水石、玉垣などの奉納物を入れると、石造物の種類が二十五種類にのぼった。その結果が表1である。その詳細を次に記す。

表1. 御嶽講碑の種類と数

No.	種類	形態	基数
イ-1	御嶽山・八海山・三笠山権現三神	文字併刻	30
イ-2	御嶽山・八海山・三笠山権現三神像	像丸彫	4
イ-3	御嶽山・八海山・三笠山権現三神像	像線刻	2
ロ-1	御嶽山座王大権現／御嶽山神社	文字単刻	29
ロ-2	御嶽山座王大権現像	像陽刻	1
ロ-3	御嶽大神+他神	併刻	4
ハ-1	八海山大頭羅神王／八海山神社	文字単刻	16
ハ-2	三笠山刀利天宮／三笠山神社	文字単刻	18
ニ-1	普寛霊神/覚明霊神/一心霊神	文字併刻	6
ニ-2	霊神碑/先達	文字	13
ニ-3	不動明王坐・立像	像刻	7
ニ-4	不動明王/清瀧・玉瀧	文字	4
ニ-5	大江大権現・大江神社	文字	3
ニ-6	金山大神	文字	1
ニ-7	大山祇命	文字	1
ニ-8	行者像	像陽刻	1
ニ-9	日大神 月大神	文字	1
ニ-10	一万五千度大抜霊	文字	1
ホ-1	寄附連名碑	文字	23
ホ-2	木曾御嶽登山記念	文字	10
ホ-3	手洗石		5
ホ-4	灯籠		3
ホ-5	句碑		1
ホ-6	和歌碑		2
ホ-7	玉垣		1

イ―1 御嶽三神碑

御嶽信仰の本尊である御嶽山座生権現と、脇神の八海山大頭羅神王・三笠山刀利天宮を一石に併刻したものが三十基と最も多い。

江戸期には御嶽山座王権現・八海山大頭羅神王・三笠山刀利天宮と仏教系の名が大半であるが、明治期に入り神仏分離によって権現・菩薩などの仏語を神名として付ける事が禁止された為、以降は神道系の御嶽山神社・八海山神社・三笠山神社・御嶽山大神・八海山大神・三笠山大神に変わった。



小川稲荷神社・御嶽碑

イ―2 御嶽三神像

衣冠束帯姿の座王権現像を中央とし、向って左側に三笠山刀利天像、右側に八海山大頭羅神王像が立つ丸彫りの御嶽三神像を四組ほど確認した。写真1は、木間ヶ瀬飯塚地区の白山神社境内に祀られた元治元年（一八六四）造立の御嶽三神像であるが、石垣も入れると高さ四m、幅四二〇mを越す大きさで、石材も江戸末期にしては良質なものが使用され、彫りも秀逸である。この像は、千葉県下の御嶽三神像としては代表的な作といえるのではなからうか。

そのほかに中里地区・三社権現境内の御嶽塚や丸古講の元大先達家の御嶽塚、木野崎地区・荏原天神境内にも丸彫りの三神像が祀られている。又、自然石碑に御嶽三神像を線刻した石碑が二基あり、御嶽三神の姿をあらわしたものであるとしては野田市内で合わせて六組の石仏が現存している。

ロ―1 御嶽山座王権現・御嶽山神社

本尊の御嶽山座王権現・御嶽山神社名のみを単独で彫ったものが二十九基と、個人宅の塚に庚申年の万延元年（一八六〇）に造立された座王権現の像を刻む笠付の塔が確認される。座王権現とほかの民間信仰の神とを併刻したものが四基みられる。

ハ―1・2 八海山大頭羅神王・三笠山刀利天宮／単独碑

脇神である二神がそれぞれ単独の石碑に刻まれたものであるが、大方が御嶽塚にセットで建てられているもので、単独の信仰ではない。

ニ―1 霊神碑／覚明霊神・普寛霊神・一心霊神

霊神碑は山岳信仰の特徴ともいえるもので、内容としては二種類あり、そのひとつが御嶽講の祖とされる人物の碑である。御嶽信仰は江戸後期に長い間の慣習を破り、御嶽山を庶民の登拝できる山として黒沢口を開いた覚明行者と、王滝口からルートを開き、御嶽信仰を確固たるものにした普寛行者が祖とされるが、その後、御嶽講の拡大に力を尽くした行者が祀られることもあり、市内では覚明・普寛両行者と共に一心行者を合わせて刻む碑が三基みられた。

一心行者は普寛行者亡き後に御嶽講の盛行に尽力し、全国的な講の普及への原動力となった人物といわれているが、富士講に次ぐ御嶽講の広がりには江戸幕府の弾圧の対象となり、文政三年（一八二〇）に門人達と共に処分を受ける身となる。遠島と

なつた一心行者は、文政四年（一八二一）に流刑地において五十一歳で亡くなっている。

## 二―2 霊神碑／野田市内の御嶽講先達

御嶽信仰の特徴のひとつに、修行を積んだ行者や講の運営に功績のあつた信者などが「霊神名」を授かり、霊神碑を造立するという事がある。本人が三十三度の御嶽山登拝を記念して建てる場合や、講員達が遺徳を忍んで建てる場合など様々であるが、その様な霊神碑が木曾御嶽山の霊場には数万基も林立し、独特の雰囲気醸し出している。市内で確認した霊神碑は十三基で、当人の信仰経歴などの詳細が刻まれた霊神碑は七基、そのほかは霊神名と命日が刻まれたものであつた。それらの数基には、同様の霊神碑を木曾御嶽山にも造立した旨が明記されており、現地調査の必要も感じた。

## 二―3 不動明王像

多くの御嶽塚には、火炎光背型の不動明王像、又は文字碑が鎮座している。御嶽山の登山口のひとつである王滝口の王滝不動明王や清瀧不動明王などと具体的な不動明王の名が出てくるものが二基ほどあり、そのほかの不動明王像も王瀧・清瀧の不動明王を祀つたものと思われる。

これは市内の富士塚と御嶽塚の決定的な違いで、富士塚は本尊碑・霊神碑のほかに庚申塔を祀り、御嶽塚は不動明王を祀る例が多い。

## 二―5 大江山大権現・大江神社

御嶽山の八合目に祀られている神社である。

## 二―6 10 その他の神霊碑

御嶽塚に祀られていた神々で、御嶽信仰に関わるものと思われるが、各講独自の信仰が含まれると思われるものも散見される。

古布内地区の岩本静を講祖とする丸古講社は太田市の金山地区・新田神社との繋がりが深いようであるが、詳細は不明である。

## ホ―1 寄附連名碑

塚や碑を造立する際の寄附者の人名と、金額が記された碑である。どの地域の誰が、いくらの金額を拠出したかを明らかにする寄附連名碑は、規模の大きめの塚にはほとんどが造立されており、金額の合計で塚造立の経費がわかる。木間ヶ瀬や中里の塚は、総額で百両前後の寄附額となっている。

## ホ―2 登山記念碑

ほとんどが昭和前期に造立され、仙台石で加工された碑が多い。昭和半ば頃まで講で代参を立てており、代参記念・登山満期記念などの銘文が記されている。この様な碑のほかに、絵馬や文字額が神社内に奉納されているケースが三ヶ所ある。

## ホ―3 7 その他の奉納物

御嶽塚には灯笼、手洗石、玉垣のほかに、僅かだが句碑、和歌碑などの奉納物もみられた。

## 二 野田市の御嶽講社

普寛の終焉の地である行田市周辺は御嶽講の活動時期が早く、隣接する高崎市の御嶽碑の造立は文化十三年（一八一六）から始まっている（4）。又、現在も関東で最大規模の御嶽講組織を維持している「関東巴講本祠教会」の祖である中里允修

が、北下総の結城に巴講社を創立したのは天保十年（一八三九）であるという（5）。

では、野田市の御嶽講の活動はいつ頃から始まったのだろうか。市内の御嶽系石造物の造立は嘉永元年（一八四八）から始まるが、江戸川を挟んだ春日部市下柳の香取神社には、すでに天保九年（一八三八）に「奉納御嶽山常夜燈」と刻まれた灯籠（現在は棹部分のみ）が木間ヶ瀬村出洲の木村勘左衛門という人物により奉納されており、この時期にはすでに御嶽講組織が出来上がっていた可能性が高い。

何れにしろ、野田市周辺に「宝山講」という講社が寛政十年（一七九八）には存在し、後年に他地域の枝講ではない独自の御嶽講として存在した可能性が強い。次に、野田市内の主な御嶽講を記す。

### 1. 宝山講

野田市内の山岳信仰の講には、「宝」を冠したマークがやたらに多い。富士講は西宝珠花河岸を拠点とする「丸宝講」の講紋であるが、御嶽講にも同様の丸宝マークが寛政年間より確認される。

紛らわしいが、これは「宝山講」をあらわすものであることが、後年の石造物からわかり、やはり拠点は西宝珠花だった可能性が濃い。御嶽宝山講の傘下として江戸末期に野田市の各地域に結成された枝講はそれぞれ、船形の壺、木野崎新町の壺、木野崎・荏柄天神の亀甲寶などのマークを使うに至ったが、明治期の変動で組織は分裂し、独自の道を歩んだと推察される。

#### ① 丸宝講・関宿講中

木間ヶ瀬堤根・神明神社の御嶽塚のふもとに立つ鑄物の不動明王は、台座に山壺紋と関宿講中を刻む立像である。裏面には

講員名がビッシリと刻まれ、関宿城下の御嶽講が嘉永三年（一八五〇）に佐野市の天明鑄物師に発注して造立した不動明王であることがわかる。

明治三十年（一八九七）に逆井利平治の講が関宿講から譲り受け、修理の上この塚に再造立したのであるが、このことから、関宿城下にも多くの熱心な御嶽講の信者達がいたことがわかる。

#### ② 覚宝山講

江戸期、宝山講に属した船形村の伊東浄心と、継嗣の伊東浄山改め真則が明治初頭に立ち上げた講と推察している。初代・浄心は明治初期に亡くなっており、真則が覚宝山講の中心者として坂東市長谷地域も巻きこんだ活動を行うが、明治二十三年（一八九〇）には逝去しており、その後、三代目を継いだ伊東とよの活動がどのようなものであったのかは不明である。

又、浄心の門人であった坂東市長谷の栗原東は覚明本講を興し、猿島郡を中心に数百名の講に発展させており、県道沿いに巨大な壺神碑を建てている。その講紋は宝山をデフォルメしたものである。

#### ③ 旭村宝山講

江戸期の宝山講に関わりのあるグループと思われる講のひとつに旭村宝山講がある。旭村は明治二十二年（一八八九）の町村制施行により目吹村、大殿井村・鶴奉村、横内村、柳沢村、宮崎新田と花井新田の各一部が合併した村である。その地域で神道修成派の御嶽教旭村宝山講が結成され、初代社長に長嶋武成、脇社長に寺田貞心が就任しており、昭和期まで代参登拝などの活発な活動が行われ、各地区に参拝記念碑の造立が確認されている。

又、守谷市坂井戸の清滝・香取神社に立つ、明治十一年（一

八七八) 造立の御嶽講碑の講紋も宝山で、目吹村・寺田一雄の名があり、旭村宝山講は利根川東部に向つて勢力を伸ばした形跡がある。

## 2. 山き講

木間ヶ瀬の頭文字である「き」を講紋に使い、「山き講」と称した。武者土坪の山中太平治が率いた講である。太平治については先達の項で述べるが、中里宿・三社権現の御嶽塚と、利根川を挟んだ対岸の小山・香取神社境内の御嶽塚(明治十五年造立)の寄附連名碑に彼の名が残されており、講組織として繋がっていた可能性がある。この三地区に共通する点は経済的な豊かさで、木間ヶ瀬・中里・小山の三ヶ所の塚はほかの塚と比べると、規模が大きく、寄附額も非常に多い。山き講は明治期、神道木曾御嶽高平教会に属したようである。

## 3. 丸古講

二川村古布内出身である岩本静が、明治九年(一八七六)に結成した御嶽講社である。岩本家に建つ明治三十七年(一九〇四)造立の登山六十二度記念碑によれば、講社は千葉・茨城・埼玉・栃木の四県内八郡、村数五十ヶ村に広まり、社員は千名あまりに達したとある。現在も利根川対岸の坂東市長須地区には丸古講から分講して発展した「丸古講猿島教会」の御嶽神社があり、野田市東金野井地区にも上野重五郎、本座勝三郎と続いた丸古講からの分講である丸古金尾講の石塔が天神社に残っている。

## 4. 旭山講

野田市内の御嶽講としては一番新しく、大正年間に取手市小文間の先達・木村旭山により結成されたもので、木曾御嶽本教傘下に所屬している。その後、三ヶ尾地区の坂巻岩次郎(旭山靈岩明神)があとを引継ぎ、初太郎(旭光東初靈神)、重男、現当主と四代にわたり講を継承しており、坂巻家の裏庭には三基の巨大な靈神碑が祀られている。

## 5. その他の講／豊徳講ほか

堤台・八幡神社には、明治十六年(一八八三)に「御嶽山太々御神楽修行」を記念した「素盞鳴戦い図」の絵馬が豊徳講により奉納されている。中野台・稻荷神社の明治十五年(一八八二)に「覚明・普寛・一心靈神碑」を造立したのは、このグループの可能性が強い。

又、柏市片山・手賀の丘公園入口には「御嶽山供養社供養塔」と刻む角柱が立ち、百ヶ村余の村名に千三百人以上の講員名を刻んだ大規模な供養塔が明治十五年(一八八二)に造立されている。これらの中に吉春村九人を始め、中根村・中根新田・桜台村の人々の名前もみられることから、石造物では確認出来ない御嶽講が市内には未だあったのではないかと思われる。

## 三 野田市の御嶽塚

野田市内の御嶽塚・碑の分布を図3にあらわしたが、その中で代表的なものを次に記す。

### 1. 中野台・稻荷神社の御嶽塚

野田橋の袂に立つ野田市中野台河岸の稻荷神社は、かつては近くの丘陵にあつたが野田橋の架けかえの際、現在の場所に移





転し、水神社と共に祀られることとなった。その境内に、御嶽講の草創期にあたる寛政十年（一七九八）に、御嶽講の祖の一人である普寛行者が関わった可能性のある御嶽三神碑が祀られた塚がある。一段下には明治十五年（一八八二）造立の覚明・普寛・一心の霊神碑が御嶽教グループによって造立され、火炎光背を背負った不動明王も鎮座している。

### 【銘文】

武尊山大権現

御嶽山座王大権現

丸宝印

意波羅山大権現

木食普寛

寛政十戊午歳二月四日

この碑はほかの御嶽講碑とは異なる特異なものなので、詳細を記してみたい。

### ① 木喰普寛について

中央の三神名の脇に刻まれた「木喰普寛」に注目したい。普寛とは、覚明行者に次いで、御嶽山・王滝口の登山ルートを開き、覚明行者と並んで御嶽講祖とされる人物である。

普寛行者は、享保十六年（一七三一）に秩父・大滝村の木村家に五男として生まれ、幼名を好八といった。若くして武芸をこころざし、三十歳で江戸に出て酒井雅楽頭に仕官し、二十五人扶持となる。八丁堀に剣道道場を開いて門人五十名余を抱える身となるが、三十四歳の明和元年（一七六四）に、不思議な縁から三峰山の観音院日照に入門し、本山派修験の道を進み始める。修行の後に名を本明院普寛と改め、江戸八丁堀・法性院を継ぎ、木喰修行（6）や全国行脚も果たし、五十二歳で伝燈阿闍梨となる。王滝口よりの新ルートの開山に挑んだのは寛政四年（一七九二）のことで、それ以後は御嶽講の流布と弟子の

育成に心血を注ぎ、享和元年（一八〇一）九月に滞在先の埼玉県・本庄市で病に倒れ、七十一歳で逝去する。これが大まかな普寛行者の経歴であるが、この碑に刻まれた造立年が事実ならば、碑の造立は普寛行者の晩年期にあたり、御嶽講の草創期の貴重な石碑ということとなる。



中野台稲荷神社・御嶽塚

### ② 初期碑と幕末碑の脇神の違い

野田市内の御嶽碑の造立が本格的に始まるのは嘉永元年（一八四八）のことで、中野台・稲荷神社の御嶽講碑造立から半世紀も後のことになる。この頃にはすでに本尊の御嶽三神は御嶽山座王大権現、八海山大頭羅神王、三笠山刀利天宮と形式が定まっており、中野台・稲荷神社の三神とは脇神が異なっている。初期の脇神である武尊山大権現と意波羅山大権現は、群馬県利根郡みなかみ町・川場村・片品村にまたがる武尊山と、秩父の意波羅山の本尊とされる神で、両山とも普寛行者が開山し、山岳信仰の拠点とした山である。少なくとも、野田市周辺の御嶽碑にはこの碑以外にみることはない脇神といえる（7）。

### ③ 修験の講

この碑で注目することのひとつは、御嶽三神名の下部分に「山嶽」のマークが刻まれていることである。これは、江戸川を挟んだ対岸の河岸で栄えた西宝珠花を拠点とする富士講・丸宝講が使用していた講紋と同様のものであり、解釈に戸惑う。しかし、この後に造立される御嶽講石造物に付された講名のほとんどが「宝山講」であることを思うと、西宝珠花では富士講とは異なる修験の講組織がすでに存在し、その組織が御嶽講に移行した可能性も考えられる。

尚、この碑の建つ周辺はかつて座生沼と呼ばれる沼地が広がっており、沼周辺には宝暦九年（一七五九）造立の道了大権現や、蔵王権現などの修験系の石仏が祀られる場所もあり、修験道とは無縁でない地であることも指摘しておきたい。

### 2. 船形香取神社・御嶽塚

市内で初出の御嶽塚は弘化五年・嘉永元年（一八四八）に船形香取神社の後脇に築かれたもので、富士塚と同様に溶岩を積み重ねた塚である。トップの石塔は台座も入れると高さ一四〇cm近い駒型の角柱で、「御嶽山座王大権現」と大書きされている。台座中央の嶽マーク脇に寶山講中と講名が並び、台座の左右には先達の御嶽院を筆頭に当村の二名の名主や有力者など四十四名の名が刻まれている。この塚にはそのほかに、八海山や三笠山、寄附連名碑など七基の石碑が配されており、万人講の寄附連名碑には他村の人名も多く、すでに当地の御嶽講はしっかりと組織づくりがなされている感じがする。又、先達・御嶽院と共に浄心という人物の影響を強く感じる塚である。

### 3. 木間ヶ瀬・白山神社 御嶽三尊像

白山神社境内に丸彫りの御嶽三尊像が祀られており、石垣も含めた容量が高さ四m、幅四二〇mと大規模なものである。木間ヶ瀬村の「丸き講」による造立であるが、石垣の上部に刻まれた寄附連名には元治元年（一八六四）の再建時と近代に入つての修理を合せて延べ三百十六名の名が残されており、当時の御嶽講への信仰の篤さを感じられる。尚、木間ヶ瀬村は名主・岩本治平の先導で天明二年（一七八二）と明治十二年（一八七九）に村をあげて大掛かりな富士塚も築いており、山岳信仰が二分していた。



木間ヶ瀬白山神社・御嶽三神像と講紋

### 4. 木野崎・荏柄天神 御嶽塚

荏柄天神社は現在小さな祠のみであるが、かつてはその境内に荏柄山・鏡国院という寺院があったらしい。そこに比較的大

きな富士塚と御嶽塚が並んで築かれており、富士塚は現在も管理され手入れがされているが、御嶽塚は急勾配の塚上に丸彫りの三神がどれも崩壊した形で横たわっており、荒廃した感じがある。

座王権現の台座に彫られた銘文から、宝山講による慶應四年（一八六八）の造立であることがわかる。正面の講紋は、寶が亀甲で囲まれたものである。木野崎村の御嶽講の造立で、船形・香取神社の塚にも関わっている浄心と、息子の浄山の名がみえる。近代に入つての展開はなかったのか、明治以降の石造物はない。

#### 5. 中里・三社権現 御嶽塚

塚上に立つ丸彫りの御嶽三神像が建てられたのは、五十八名が九十両あまりを拠出した慶應三年（一八六七）の再建時と思われるが、寄附連名碑をみてゆくと明治十年（一八七七）と明治二十一年（一八八八）にも大掛かりな塚の工事が行われており、中里宿には御嶽への篤い信仰があったことがわかる。塚中には、御嶽三神像のほか大小の寄附碑や中里俳句連による句碑など、多彩な石造物が十九基ほど配されている。中里宿の御嶽講の先達は横張甚右衛門で、永く中里宿の御嶽講先達として活躍した人物である。

又、寄附連名碑には木間ヶ瀬村の御嶽講社・山き講の中山太平治と逆井利平治も各一両を投じた事が記されおり、中里講との繋がりを感じさせる。

#### 6. 木間ヶ瀬内野堤根・神明神社 御嶽塚

水害から守る為か、塚上に社殿が建てられており、その傾斜に沿って御嶽碑が配される塚で、下部に立つ寄附連名碑に造立

の経緯が書かれている。

明治十五年七月各地虎列刺病流行而威其毒者忽然有喪父母妻子兄弟朋友者而其慘狀不遑枚舉□然而傳染勢頗劇烈衆庶戰慄焉此時修成派信徒逆井利平次氏慨歎之餘與同盟諸氏謀而祈社中衆庶之安全干信州御嶽山神德果不空衆皆得免惡毒感染之憂□矣嗚呼神德之靈妙實可恐可貴焉於□衆皆欲報神德村內鎮守神明社境內圍建設神祠而請諸千葉県□令忽下焉時明治十七年七月一日也矣其後明治十八年信陽西筑摩郡黒澤村里宮華表額面拜毫信州御嶽神社者係有栖川一品親王之親筆請書寫之神道修成派管長新田邦光者君則諾尋而又就同郡玉滝村祠掌滝龜松氏而請御嶽山分靈事速成故逆井氏等諸氏同心勦力所得写之文字勤石造立神祠而欲永仰其神德云爾 明治廿二年五月 歩靈老人撰並書

明治十五年（一八八二）に、この地方はコレラの流行があり、その慘状をみた出洲坪の御嶽講信者・逆井利平治氏が御嶽神の勧請を決意し、築塚をした経緯が記されている。塚の完成は氏の決意から七年目にあたり、塚の造立が容易なことではなかったことが推測される。

#### 四 野田市の御嶽講先達

明治期の宗教改革で、山岳信仰界は修験の還俗や、神道への転換という未曾有の変革期を迎えている。その時期に分断された影響か、石造物に刻まれた宗教者や市井の先達名の系譜を読

むことが困難であったが、霊神碑その他から解明できた御嶽講の代表的な人々を紹介する。

### 1. 海心霊神

目吹・近藤家の御嶽塚に立つ供養塔に刻まれている霊神名である。伝承はすでに消えているが、「宝山講祖海心霊神」とあることから、中野台・稻荷神社に普寛行者が関わって建てた御嶽講碑に付された「山金講」（宝山講）を率いていた宗教者の可能性がある。この人物の率いる宝山講から市内の御嶽講は裾野を広げて行ったとの推察もできるが、野田市内の御嶽信仰の石造物中に「海心」の名が出てくるのはこの一基のみである。



目吹・海心霊神碑

### 2. 先達・御嶽院

嘉永元年（一八四八）造立の船形・香取神社の御嶽山座王大神権現碑に彫られている先達名である。寶山講に関わると思われるが、守谷市高野・浅間神社境内にも御嶽院が関わって造立された御嶽塔（慶應三年）がある。「宝珠花・御嶽院」と居住地も付

されていることから、河岸で栄えた埼玉県春日部市西宝珠花を拠点として活躍し、江戸末の宝山講を率いていた先達である可能性もある。明治以降の御嶽院の動きとして、還俗して氏名を変えた可能性が強く、その後の動きは不明である。唯、西宝珠花には幕末から御嶽教・丸宝講があり、江面新助氏が先達として講を率いていたことから、御嶽院が氏と同一人物であるとの推測も立つ。

### 3. 伊東浄心・浄山・とよ

野田市域に御嶽講が結成された寛政頃から浄心は修験者であり、寶山講傘下で活動していたものと思われる。岩井地域の御嶽講拡大にも関与し、御嶽山登山百回などの偉業を達成。明治維新の宗教改革の始まる明治四年（一八七一）に亡くなっている。

船形明光地の伊東家前には江戸末期に造立された御嶽三神が線刻された自然石碑を始め、霊神碑や雷電宮などの石塔の配された塚と御嶽堂がある。堂は数年前に現当主によって建て替えられており、御神体の鏡や文久二年（一八六二）に製造された木造の「御犬様」と称する犬が祀られている。当家の御嶽塚に立つ霊神碑により、伊東家では三代にわたり御嶽信仰の先達をしていたことがわかる。伊東浄心の名が刻まれた石碑は船形・木野崎・坂東市薙打などに点在する。

① 東家の裏に当たる道路脇に剥落気味ではあるが、馬口印をむすぶ馬頭観音塔が祀られている。施主浄心とあり、このことから文化元年（一八〇四）には行者として活動していたことがわかる。

② 船形・香取神社の塚から、村には嘉永元年（一八四八）に

宝珠花の御嶽院を先達とする寶山講が結成されていたことがわかるが、この塚の三笠山刀利天宮碑と清瀧不動明王碑には浄心の銘が刻まれている。

③ 伊東家の入口に築かれた御嶽塚の本尊碑は御嶽山三神が線刻されたもので、裏面にも三宝大荒神の線刻が施されている。年代は明記されていないが、台座に刻まれた世話人や講中の人々の氏名から、江戸時代の造立であることが推察され、香取神社の造立前後と思われる。石工は江戸筋違組・源八とある。

④ 船形から利根川を挟んだ対岸に当たる蕙打の県道脇に、巨大な霊神碑が立っている。銘文によれば、これは御嶽講の栗原東という人物の霊神碑で、江戸末期から当地方の御嶽講数百人を束ねた覚明本講の創始者であるという。その脇に立つ供養塔に、栗原東の師として「覺宝山大々長登山一百回口故伊藤至善平浄心霊神」が刻まれている。

⑤ 伊東家前の御嶽塚に立つ霊神碑は大正三年（一九一四）の造立で、初代伊東平・二代伊東真則・三代伊東とよの霊神名と命日が彫られている。伊東平とは明治後に神道に転換後の名で、江戸時代の行名は浄心。二代目真則是息子の浄山で、三代目・伊東とよは真則の娘に当たる女性と推察される。

台座には講のメンバーの氏名と共に、No.5の栗原東霊神碑の台座にあったと同じ、角ばった宝山マークが刻まれており、浄心は明治四年（一八七一）、真則是明治二十三年（一八九〇）、とよは二十年後の明治四十二年（一九〇九）に逝去している。



船形・伊東家御嶽堂のお犬様

#### 4. 山中太平治

木間ヶ瀬村の御嶽講「山き講」を率いる先達を務めた人物である。木間ヶ瀬地区武者土の中山家には現在も、太平治が築いた御嶽塚があり、明治十二年（一八七九）造立の御嶽碑が祀られている。その麓には山中太平治が造立した亡き父の霊神碑や、山き講のマークを彫り込んだ手水石と共に太平治の顕彰碑もここに建立されている。その銘文を左記に記すと、

##### 山中太平治君之碑

君者下総国東葛飾郡木間ヶ瀬村人也以天保十年一月九日生君祖先以来住於中利根川東岸字小通里然其地者接大川屢罹水患至明治十年遂移居於此地君常崇信御嶽神十五歲始往信濃登御嶽爾後登山至三十三回故近邑之信徒感其誠意欽其篤志為入講社者始數百人遂推君稱先達矣君明治十一年十一月九日任教導職試補十六年十月十五日補教導職權訓導十七年九月二十九日任權少講義廿年五月三日任少講義廿五年十二月廿

三日補中講義明治廿六年罹病以八月三十日溘然永逝  
享年五十五葬先塋之墓側娶同村田中仁右衛門二女津  
岐子生三男四女君之先師高平教會長高平静濟君贈名  
神徳足彦光民命以表其誠信云

銘曰 生來良直 従少崇神 講徒數百

奉公忠純 人感誠意 克結交親

正四位勲四等文學博士重野安繹篆額

岩本鳳城撰文 男衛平書

天保十年（一八三九）に木間ヶ瀬村武者土に生まれた太平治は、御嶽登拜三十三度を果たした父の影響か敬神の念が深く、十五歳で御嶽の初登山を果たすなど精進の後に、山ぎ講を結成する。入講者は数百人に達し、講は大いに発展するが、明治二十六年（一八九三）に病に倒れ、五十五歳で逝去している。

太平治は木間ヶ瀬村・白山神社の旧御嶽社を、二十五歳の元治元年（一八六四）に大規模な御嶽三神像に建て替えた発願主の一人である。現在も山中太平治家の納屋には、太平治が使用したと伝わる多くの金剛杖が残されている。

## 5. 逆井利平治

逆井家の門前には明治二十八年（一八九五）に、利平治が造立した大きな出羽三山・百観音巡拝塔が立っている。御嶽講にも熱心な、地域のリーダーであったようだが、先達であったかなどの詳しいことはわかっていない。内野堤根・神明神社の御嶽塚は利平治の尽力で完成している。

木間ヶ瀬村の山ぎ講は、山中太平治と逆井利平治との二本柱で動いていた節がある。木間ヶ瀬・白山神社の御嶽三神像の発願主も太平治と利平治の二人であり、他所の寄附連名にも二人で同額の寄附を行なう場合が多くみられた。

利平治の名が最後に確認されるのは、明治三十年（一八九七）に丸宝講関宿講中から譲られた金銅仏・不動明王の修理に関わる世話人としてである。

## 6. 横張甚左衛門

慶應三年（一八六七）の中里三社権現・御嶽塚の再建寄附碑には願主として六両を拠出したことが刻まれ、明治十年（一八七七）の碑にも講頭として名を連ねている。又、後に紹介する中里宿・染谷岱順氏により、明治二十三年（一八八九）に書かれた『御嶽山道行日誌』の代参講も甚右衛門が先達を務めており、中里宿の御嶽講を永い間率いた先達であった。

三社権現の御嶽塚の麓には、昭和四年（一九二九）に中里講社によって甚左衛門の顕彰碑が建てられ、御嶽登山三十七度を記した「故先達横張甚左衛門翁之碑」の裏面には中里地区八十四名の氏名と共に、地元の名士が詠んだ「とふとしや御嶽の山をきりわけて神乃足跡たどるまこころ」「身をきたえ心練らんと御嶽山真こころこめてうけし清瀧」の和歌が刻まれている。甚左衛門が御嶽講の先達として出発したのは、二十代前半であったようだ。

尚、甚左衛門を支えた人物に、大地主で名主も勤めた西山庄右衛門がいた。寄附碑にも甚左衛門と同額の金額を拠出しており、自宅には明治二十年代に造立した立派な御嶽塚が残されている。

## 7. 長嶋武成

この人物の名を初めて確認したのは、目吹地区の寺田家の塚に立つ御嶽碑である。明治十年（一八七七）に建てられた碑の台座には「宝山」の文字を丸めにデフォルメしたマークが彫ら

れ、長嶋武成はこの社中の社長で、寺田家の貞信は協社長であった。

この宝山講社は「旭村宝山講」として昭和期まで活動しており、長嶋武成は初期の指導者であったようだ。その後に長嶋栄政という人物が跡を継いでいるが、長嶋家が何処の住人で、どのような経歴の人達であったのかなどの詳細は不明である。

### 8. 岩本静

岩本静は、嘉永元年（一八四八）に古布内村に生まれた。若い頃より御嶽神を信奉し、厳しい修行の末に二十八歳で御嶽丸古講社を結成する。次に、静の登山六十二度記念碑に刻まれた碑文を記す。

丸古講社岩本静之素性ハ父岩本甚蔵之次男也嘉永元年申年十二月十五日生ニテ八歳ヨリ同村浄禅寺住職本橋禅光之筆子成十五歳迄勤学ス十六歳ニテ農ニツキ平常誠意ヲ専トス尚御嶽大神ヲ信仰シ衆人救命ノ為朝暮水行一百日怠慢ナク勤務ス

后独立シテ師家屋ヲ設テ口信心ノ積年神成之應護速ナリ故明治九年九月丸古講社結集シ例年登山ス入講追へ増加シ明治十四年三月権少講義十六年一月大講義十八年三月縣廳廉第七三号丸古教会所大社長教正進

明治廿六年七月之析禁玉瀧村宇大俣地登山度数記録碑建築ス同廿七年六月爰地記録碑ヲ引写シ立講社盛大之功ヲ擧テ往々之記由是ニ預略ス 大井武美謹書

### 諸山修行記

上野国 足利桐生大田金山 下野日光山 二荒山 大真名子山  
常陸 筑波山 白根山

武蔵 三峯山 御嶽山 高尾山  
駿河 富士山 越峯 八海山  
信濃 御嶽山内 地獄谷 継子嶽 継母嶽  
中道巡り 頂上三七日 木食口笠素豆ノ大行

講社は千葉県を始め四県内八郡に広まり、講員千名を擁するに及び、御嶽登山六十二度を果たし、大教正で昭和十年（一九三五）頃に亡くなっている。

### 五 御嶽登山日記

明治二十三年（一八九〇）に代参として御嶽山に登拝した旅日記が、中里・染谷静宅に残されている。染谷家は江戸末期に初代・玄岱が漢方医を開業の傍ら、盛寿館という手習塾を開いており、明治期に入り子息の岱順は小学校の教師となった。

その岱順が先達の横張甚左衛門を中心八名で、御嶽山へ代参として登拝した折に記したものである。縦一三cm、横七cmと極めて小さなメモ帳であるが、中山道沿い道筋、発着時間、名所の説明など丁寧に書き込まれており、当時の御嶽山の旅筋がわかる興味深い日誌である。尚、原文の内容には影響のない程度に、筆者が手を入れていることをお断りしておく。



染谷静家所蔵・旅日記

裏表紙

千葉縣下総国東葛飾郡

川間村中里第六百廿六番地 染谷岱順

誌

明治廿三年第七月廿七日日本村先出立

同行八人左之通り 横張甚左衛門 染谷房次 西山寅之助

西山山治郎 志村廣吉 神山源蔵 染谷

定吉

七月廿七日

七月二十七日 粕壁ヨリ岩槻。岩槻ヨリ大宮。

全所ヨリ汽車零時四拾七分ニ投シテ横川下車四時三拾分。

夫ヨリ坂本へ着全五時五分。同宿小竹や三重エ門泊リ。

全日高崎停車所ヨリ乗車。安中ヨリ磯部迄ノ間大ニ汽車中ニテ

夕立ニ逢ふ。全日願テ一句ヲ詠ス

水に浮ブ西 亦ほしき 暑□事

七月廿八日

全二十八日、坂本出立

碓井頂上丸屋少休。夫ヨリ暫時ニシテ長野群馬両縣ノ境孀恋。

夫ヨリ新軽井沢、車ノ停車場ヨリ石尊山及ヒ浅間山アリ。

夫ヨリ沓掛宿ヨリ追分、借宿村昼食。夫ヨリ御代田村停車場ヨ

リ人力車ニ乗ル岩村田少休。夫ヨリ筑摩川ヲ渡リ南御牧村。

夫ヨリ望月駅ノ前少シ峠アリ望月、直乗車。

全駅河内や着午後四時半ナリキ。望月□□前五時十分。

次ニ芦田□□坂上リ。続キ笠取峠絶頂、小松や少休ス。

其所ニ三光ノ絡石アリ。笠取峠ヨリ込シ信州小縣郡長久保村。

夫ヨリ和田翠川着前十時五分昼食、和田村前ニテ暫し時雨ニ遭

ふ。

翠川ヨリ講社一同馬ニ乘リ和田峠登リ口ニテ時雨ニ逢フ。

東餅やニテ少休シ。夫ヨリ大ニ雷雨ニ逢ヒ、暫時西脇やニテ休

憩シ出立。外又モ雷雨。下諏訪丸や迄降り續キ大ニ難儀ス。全

日和田峠鳥上。全宿丸や泊リ。

八月二十九日

諏訪丸屋出立午前四時四拾五分。夫ヨリ塩尻峠栖下迄人力車ニ

乗リ、諏訪丸やヨリ出テ九十丁町、全ケ所ニ板橋ヲ□ニテ富士

山ヲ望メハ四方ニ山ヲ聳ヘ諏訪湖ヲ前ニ清□。

山ト山ノ中間ニ富士ノ高峯目前ニ見ル。塩尻峠ヲ下リ全宿ニテ

川上屋ニテ少休ス。夫ヨリ馬車ニ乗リ、本山中宿昼食一同馬車

ニ乗リ着スル時間九時四十分ナリ。塩尻ヨリ洗馬ノ間ニ□□ケ

原其側ニ山本勘助ノ見老松アリ。昼食後、桜沢ト贅川トノ中間、

楢川村ヨリ雷雨ニ逢ふ。贅川宿柏や喜右衛門少休シ。暫時ニシ

テ雷雨止ム。楢井村少休ス。夫ヨリ鳥居峠馬ニテ五名乗リ越ス。

上下屈險シ坂ナル故、後々馬ニ乗ルベカラズ。全日藪原宿日野

や文治郎。着午後六時二十分ナリ。

七月三十一日

三十一日、日野や出立。午前四時五分、宮ノ越駅ノ前ニ木曾義

仲手洗ノ石碑、向ヲ見渡セハ義仲ノ旧跡アリ。夫ヨリ橋ヲ渡リ

テ義仲ノ石碑ナリ。夫ヨリ宮ノ越駅。全日、福島蕙や嘉□。全

や着スル午前八時二十分ナリキ。

往昔木曾義仲公 鎮守南宮神社水御手洗也唱来廢年歴叟歎今

新石船造立仕者也。

月日 願主村中 木曾宣公舊里碑 文化十年癸酉秋八月

從五位下伊勢守山邨 良由謹撰併書

碑文ハ略ス

福島出立、午前十一時三十分。福島ヨリ三岳村小坂少休シテ距

ル一里八丁余時十二時四十分ナリキ。常磐橋少休。

夫ヨリ□□□□峠ニ掛リ、登リ始メヨリ少々時雨ニ逢フ。同峠

少休シ午後四時前十分、王瀧前ニ船渡シアリ。王瀧村瀧岩之宿

へ着午後六時十分。全家泊ス。

八月一日

八月一日、全家出立。



坂岩戸山参拝其側殿ニ小松宮ニ品親王ノ真筆ノ額面御嶽神社ノ四文字アリ。全三合目少休シ、全三合目ノ側ニ御三方アリ。其ノ前ノ石坂三百七丁二枚アリ。夫ヨリ大瀧ヲ参拝同行一周大瀧ニ掛ル。夫ヨリ暫時下リ坂、清瀧山参拝同所ニテ、一同瀧ニ掛ル。夫ヨリ、暫時登リテ昼食ス。夫ヨリ八海山ニ参拝。八海山前小屋ニ居ルニ、雷雨ニ逢フ。夫ヨリ三笠山へ登ル時、少々雷雨アリ。夫ヨリ三笠山ヲ参拝。尚奥院ヲ参拝及ビ御池廻リヲナス。夫ヨリ暫々下リテ、田野原ノ小屋ニ泊ス。

#### 八月二日

全二日、小屋ヲ出立。午前三時一同松明ニテ登リ、御頂上ニテ御雷光ヲ拝シ夫ヨリ奥院参拝。途中、月ノ門、日ノ門ノ難所アリ。夫ヨリ同所小屋ニ戻リ暫時小休シ。夫ヨリ鍔ノ峯へ参拝。同峯ノ石坂一百枚アリ。夫ヨリ二ノ池、三ノ池ノ廻リヲナス。黒沢下リ口九合目小屋ニテ休ム。夫ヨリ七合目小休ス。夫ヨリ□□□ノ前小屋ニテ休ミ。夫ヨリ午後六時、黒沢村田中屋へ着ス。

#### 八月三日

全三日同屋ヲ出立。午前十一時四拾五分、福島駅葛屋屋昼食。着午前九時三十分ナリキ。藪原宿日野や文五郎少休シ。夫ヨリ鳥居峠頂上迄馬ニ乗り、坂ヲ下リテ、榑井宿越後や泊リ。着午後六時三十分。

#### 八月四日

同屋出立午前五時五十分。夫ヨリ本山駅ヨリ一同馬車ニ乗り、塩尻驛川上嘉十郎着。午後十一時二十分着。夫ヨリ塩尻峠ニテ小休シ。諏訪驛御神側宮下小休シ。全日、植橋屋吉助へ泊ス。全屋へ着、午後六時二十分。

#### 八月五日

全五日同宿ヲ出立。午前四時五十分、和田峠東膳や小休シ。全禁ヨリ長久保池田屋、直車ニ乗着タル。時間十二時、笠友峠頂上少休。夫ヨリ暫クニシテ仲口川ヲ渡リ岩村田桔梗屋泊リ。着

スル時間七時三十分。夜半ヨリ朝ニ掛テ雨。

#### 八月六日

全六日、同町ヲ出立スル。午前五時四十分。御代田ヨリ午前九時十七分発ノ汽車ニ乗り、新軽井澤ニ着ス。夫ヨリ碓井峠ニ掛リ峠半下リニシテ、大ニ夕立ニ逢ヒ山下坂本驛少休止ス。着スル時間午後二時。暫時休足ニテ昼飯ヲ食ス。全午後四時五拾五分、横川ヨリ汽車ニ乗シ全午後六時、高崎駅信濃や金五郎ニ泊ス。

#### 八月七日

同所七日前六時二十分、汽車ニ乗シ大宮着キ下車ス。全日、粕壁宿昼食。全午後六時三十分頃帰ス。

#### おわりに

野田市内の山岳信仰を石造物から探る、という着眼で出羽三山信仰、富士信仰の調査結果を『研究報告』九号、十二号に報告してきた。今号の御嶽信仰で市内の三大山岳信仰が報告できたことは、大きな喜びである。

市内に築かれた山岳信仰関連の塚は大小合わせて百基以上もあったが、このように夥しい塚が存在するにも拘わらず、子孫からの聞き取りがほとんど得られなかったのは、時の流れとはいえ残念なことであった。

したがって、今稿はジグソーパズルの組み立ての様に、寄附連名碑に刻まれた氏名や霊神碑の内容を突き合わせるといふ地道な作業が主流の、まさに「霊神碑が語る野田市の御嶽講」となった。

今後とも石造物以外からの研究も進められ、江戸近郊の山岳信仰研究の進展を期待している。

野田市御嶽塚・石造物一覽

総No.	No.	所在地	形態	碑数	銘文等	講	塚中最も古い石造物造立年	西暦
1	1	中野台河岸 稲荷神社	塚	1	座王・武尊・意波羅権現	丸宝講	寛政10年2月	1798
2	2	船形 香取神社	塚	8	御嶽山座王大権現	寶山講	弘化5年3月	1848
3	3	船形明光地 個人／先達	塚	2	御嶽山三神線彫・靈神碑	寶山講	弘化5年3月	1848
4	4	木間ヶ瀬内野堤根 神明神社	塚	1	不動明王像／天明鑄物	丸宝講	嘉永3庚戌3月	1850
5	5	目吹上中山 個人／先達	塚	6	座王大権現像外	旭村宝山講	安政7年3月	1860
6	6	木野崎新町 大杉神社	塚	5	御嶽山三神	丸寶講	万延元申11月	1860
7	7	木間ヶ瀬飯塚 白山神社	塚	4	御嶽山三神像	山き講	元治元年	1864
8	8	中里 三社権現	塚	19	御嶽山三神像外		慶應3年11月	1868
9	9	木野崎下町 荏原天神	塚	4	御嶽山三神像外	宝山講	慶應4年5月	1868
10	10	横内 香取神社	塚	5	御嶽山三神	旭村宝山講	明治3年11月	1870
11	11	目吹宮作 個人／先達	塚	5	御嶽山三神	旭村宝山講	明治10年11月	1877
12	12	木間ヶ瀬羽貫 個人	塚	1	御嶽山三神・靈神碑外	山き講	明治11年	1878
13	13	木間ヶ瀬武者土 個人／旧先達	塚	7	御嶽山神社	山き講	明治12年5月再建	1879
14	14	堤根 ゴルフ場際	塚	3	御嶽山三神		明治13年8月	1880
15	15	目吹上高根 香取神社	塚	3	御嶽山大神		明治13年11月	1880
16	16	大殿井長割 個人	塚	2	御嶽山三神	宝山講	明治13年	1880
17	17	小山 稲荷神社	塚	3	御嶽山三神	丸古金尾講	明治15年3月	1882
18	18	目吹城山 個人	塚	3	御嶽山三神	旭村宝山講	明治15年12月	1882
19	19	中野台河岸 稲荷神社	塚	2	普寛・覚明・一心靈神	山三講	明治15年10月	1882
20	20	鶴奉宮前 個人	塚	1	御嶽山三神		明治18年4月18日	1885
21	21	堤根 菅原神社	塚	6	御嶽山三神	旭村宝山講	明治19年10月	1886
22	22	三ツ堀 香取神社	塚	4	御嶽山三神・灯籠外	丸宝講	明治19年	1886
23	23	尾崎 香取神社	塚	2	御嶽大神		明治20年2月	1887
24	24	古布内山 個人／旧先達	塚	12	手洗石	丸古講	明治21年旧6月	1888
25	25	古布内山 個人	塚	1	御嶽山三神	丸古講	明治22年	1889
26	26	木間ヶ瀬内野堤根 神明神社	塚	5	御嶽山三神		明治22年5月力	1889
27	27	中根 鹿島神社	塚	7	御嶽山三神	旭村宝山講	明治23年4月	1890
28	28	中里阿部 個人	塚	2	御嶽山三神		明治25年	1892
29	29	宮崎 宮崎小前道	塚	3	御嶽山三神	旭村宝山講	明治31年10月	1898
30	30	東金野井 天満宮	塚	4	御嶽山三神	丸古講	明治37年10月	1904
31	31	柳沢 稲荷神社	塚	2	御嶽山三神		明治38年6月	1905
32	32	木間ヶ瀬飯塚 個人	塚	1	御嶽山三神／三峰塔		明治力	1911
33	33	木間ヶ瀬前堀 個人	塚	1	御嶽山三神	丸古講	大正3年4月18日	1914
34	34	東金野井 個人／旧先達	塚	3	御嶽山三神	丸古講	大正4年9月	1915
35	35	鶴奉 稲荷神社	塚	2	御嶽山三神	旭村宝山講	大正14年10月15日	1926
36	36	鶴奉横内境	塚	1	御嶽山三神		昭和11年11月	1936
37	37	鶴奉・稲荷神社前道 個人	塚	1	御嶽山三神		昭和16年11月	1941
38	38	尾崎堂山 路傍	塚	1	御嶽神社		昭和力	
39	39	鶴奉 アヤマコース角	塚	1	御嶽山三神			
40	1	野田下町 東正寺	碑	1	御嶽山三神	宝山講	嘉永5年11月	1852
41	2	尾崎 威徳院	碑	1	御嶽山神社		明治11年4月吉日	1878
42	3	船形下村 斜面	碑	1	御嶽山神社		明治12年	1879
43	4	西高野 雷電神社	碑	2	御嶽山三神	丸古講	明治16年9月	1883
44	5	目吹十年道 路傍	碑	1	神像陰刻		明治16年10月	1883
45	6	大殿井 香取神社	碑	1	御嶽山三神	旭村宝山講	昭和10年9月	1883
46	7	古布内 八幡神社	碑	3	御嶽山三神	丸宝講	明治20年1月	1887
47	8	船形下村 個人	碑	2	御嶽大神	旭村宝山講	明治20年3月	1887
48	9	岡田644辻	碑	1	御嶽山大神		明治23年1月	1890
49	10	古布内山 個人	碑	1	御嶽山三神	丸古講	明治28年11月	1895
50	11	古布内山 個人	碑	1	御嶽山三神	丸古講	明治40年	1907
51	12	古布内山 個人	碑	1	御嶽山三神	丸古講	明治力	1911
52	13	船形松山 竹林中	碑	1	御嶽山三神		明治力	1911
53	14	古布内堀ノ内 雷電社		1	手洗石	丸古講	大正5年6月	1916
54	15	船形下村 個人	碑	1	御嶽山三神		大正6年10月	1917
55	16	船形西浦 旧清明寺前	碑	1	御嶽山三神		大正6年3月	1917
56	17	西三ヶ尾 香取神社	碑	3	御嶽山三神	旭山講	大正8年12月	1919

57	18	古布内堀ノ内 十二神社	碑	1	木曾御嶽登山記念	丸古講	大正13年5月	1924
58	19	木間ヶ瀬飯塚 個人	碑	1	御嶽山三神		大正13年	1924
59	20	船形下村 個人	碑	1	御嶽山三神		大正13年2月	1924
60	21	親野井 個人	碑	1	御嶽山三神	丸古講	大正力	1925
61	22	清水 八幡神社	碑	1	御嶽大神外		昭和2年9月	1927
62	23	船形下村 個人	碑	1	御嶽山神社		昭和15年10月	1940
63	24	船形明光地 個人	碑	1	御嶽山		昭和30年	1955
64	25	古布内表 個人	碑	1	御嶽山三神	丸古講	昭和33年5月	1958
65	26	西三ヶ尾 個人／先達	碑	3	霊神碑	旭山講本部	昭和43年12月	1968
66	27	東金野井 個人／旧先達	碑	4	御嶽神社	丸古金尾講	昭和力	
67	28	三ツ堀 公民館前道	碑	1	御嶽大神		不明	
68	29	船形下村 個人	碑	3	御嶽山神社外			
69	30	船形下村 個人	碑	1	御嶽山三神			

【註】

- (1) 生駒勘七『御嶽の信仰と登山の歴史』第一法規出版 昭和五十五年
- (2) 拙稿「野田市の山岳信仰③ 浅間塚が語る富士講の隆盛」『研究報告』一一号 平成十九年
- (3) 拙稿「小谷三志日記に見る野田市の不二道」『房総の石仏』一七号 二〇〇七
- (4) 『高崎市史』資料編一三 信仰編 近世石造物（平成十五年）五二六頁
- (5) 西海賢二『木曾御嶽本教五十年のあゆみ』（木曾御嶽本教 平成九年）八六頁
- (6) 米・粟・麦等の五穀を断ち、そば粉・木の実を粉にして水で溶いた物を常食とする。そのような修行を行う僧侶を、木食上人と呼ぶ。
- (7) 前出、註3 御嶽講碑には武尊権現・大頭羅天・意波羅天・刀利天の四神を脇神として刻む碑がある。

【その他参考文献】

中山郁『修験と神道のあいだ』弘文堂 平成十九年  
 日本山岳修験学会『山岳修験 木曾御嶽特集』四二号 平成二十年

(いしだ・としこ 当館展示協力員)